【研究論文】

宗像氏貞の居城「岳山城」について

北部九州中近世城郭研究会　藤野 正人

１．はじめに

（1）岳山城とは

岳山城は、福岡教育大学の背後、宗像市と岡垣町の境にある城山（じょうやま　標高 369m）の山上に位置。その城域は、宗像市陵厳寺、三郎丸、石丸、遠賀郡岡垣町上畑にまたがる。宗像地方の領主としての最後の大宮司、宗像氏貞の本城である。蔦ヶ嶽城・赤馬山城とも呼ばれる。

『宗像記追考』　本書第六　筑前諸将之事（略）

一　本書に宗像赤間庄蔦ヶ岳の城、宗像四郎氏貞、云々、此氏貞の御事、前に記す事詳なり、

一　蔦岳城の草創、何の代と云事たしかならず、（足利）尊氏公建武三年西国下向の時、宗像が館に入せ玉ふとあるは、此蔦山の城に入せ玉ひたるなりと云伝へたり、さて又氏貞此城に入せ玉ふ事を伝え聞くに、最初には白山の城（宗像市山田　図２）に御入ありて、永禄三年の夏、此蔦山の城に御入なり、同五年にその名を岳山の城と改めらる、此蔦山は赤馬の庄稜（陵）厳寺の境内なり、廃城となりて後は、城山と申けり、此城の大手は辰己の方うとと云所なり、東の口を門司口と云、北の口を石峠の口と云、此石峠の道すこし坦路にして、小荷駄の通ふ路也、氏貞卿御入城ありて、修理をくはへ玉ひ、外曲輪堅固に構へられて、当国無双の城也、天正十六年太閤（豊臣秀吉）の上意として、城を毀ち畢、（略）

（2）宗像氏貞について

宗像氏貞　天文十四年（1545）～天正十四年（1586）

大内氏・毛利氏・大友氏といった巨大な戦国大名の狭間で時に応じて上級権力者を選択し宗像郡を拠点に遠賀、鞍手郡の一部にも勢力を拡張した筑前の有力な領主。

一方では宗像社の大宮司（神官）でもあり、祭神信仰・神事を通じて社領を経営した。

天文十四年（1545）周防黒川館で誕生する。

天文二十年（1551）陶隆房の謀反により、黒川隆像（宗像氏男）が大内義隆とともに自害する。宗像氏貞（黒川鍋寿丸）は、陶隆房（晴賢）の支援を受けて宗像に入る。

永禄五年（1562）　宗像氏貞が城山に城を築き岳山と名付ける。

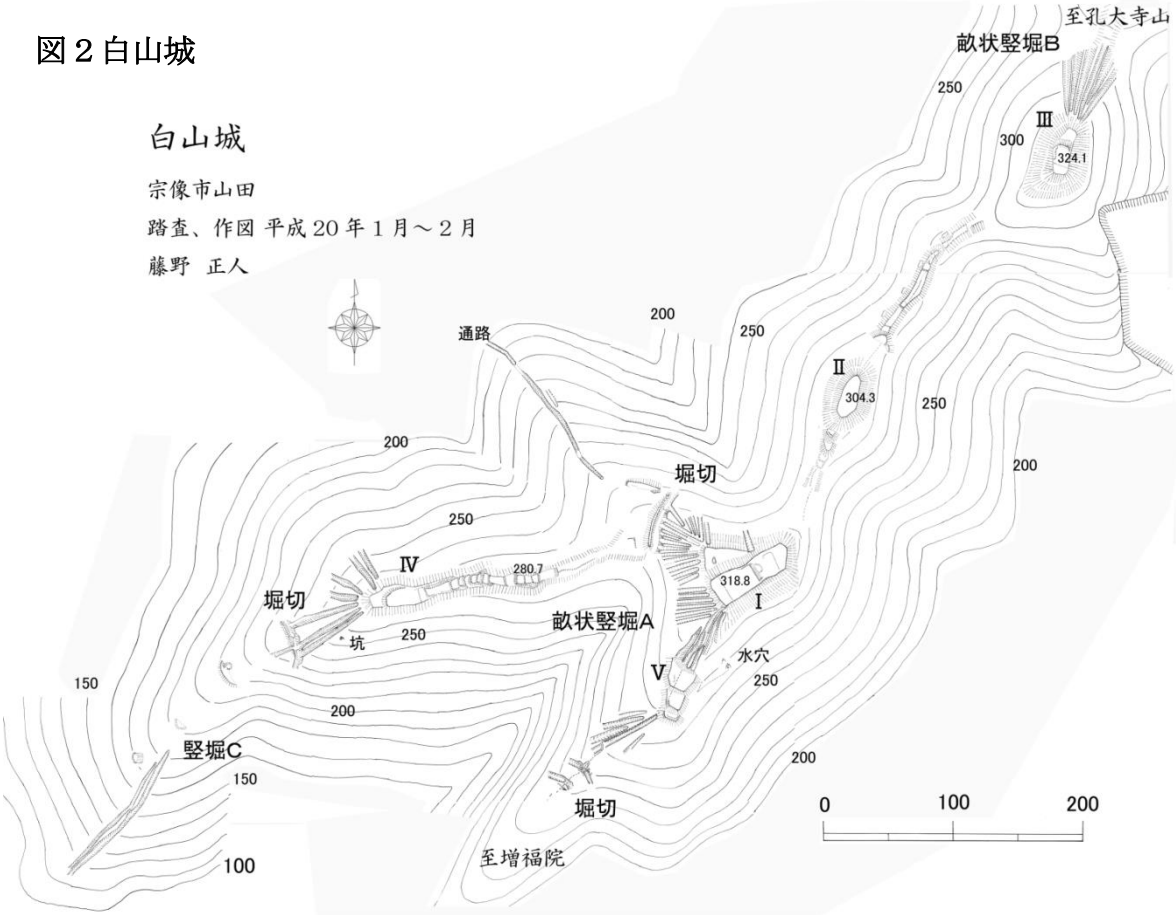
天正六年（1578）　宗像社辺津宮第一宮本殿遷座式が行われる。
（功治三年焼失した本殿の再興）

天正十四年（1586）氏貞死去。嗣子なく領主としての宗像大宮司家は断絶に至る。

図１　岳山城

竪堀
茶臼山城
宗像市三郎丸一の構口
100
150
200
宗像市陵厳寺
至　尾降神社
畝状竪堀
250
登山道分岐点
300
通路
至　中道寺登山口
十本杉
防空壕
369.3
三重堀切
城山閑跡
畝状竪堀
A
346.5
328.2
連続堀切
宗像市石丸
至上畑　、門司口
B
石列
至石峠
329.3
二重堀切
344.6
0
100
200
遠賀郡岡垣町上畑
岳山城（蔦ヶ岳城）
宗像市陵厳寺、三郎丸、石丸
遠賀郡岡垣町上畑
踏査　平成20年7月～21年1月
田中伴次郎　大塚 紘作
塩川三千伸　是永 貴志
藤野　正人
作図　平成21年1月19日
藤野　正人

図２白山城



２．岳山城の構造

（1）岳山城の構造概要（図１）

急峻な山塊である城山の山上にある。山上の尾根総延長約 1 ㎞にも及ぶ範囲に駐屯空間である「曲輪」（くるわ）と呼ばれる削平地群とそれを守る防御施設（竪堀、堀切等）からなる城郭遺構が確認できる。福岡県内においても屈指の大規模城郭である。

山上の狭隘な地形の中で駐屯空間を確保するため山上の尾根を極限まで削平し多数の「曲輪」（平坦面）を造成。曲輪群は、山頂を中心として東西に曲輪が展開する主城部分Ａと、山頂より北、石峠に向かって派生する尾根上に曲輪が展開する曲輪群Ｂに大別される。

曲輪の斜面は、近世城郭に見られる高石垣などはないものの「切岸」（攻城側の侵入を阻むため急崖状に切り落とされた構造）と呼ばれる人工崖に仕立てられ、さらに切岸の下方には、攻城側の横移動を妨げる目的から設けられた「竪堀」や竪堀を連続させることによりさらに遮断性を高めた「畝状竪堀」が設置されている。全域で約 170 条にも及び、設置数は北部九州において最多のクラスになる。また、岳山城の特徴として「竪堀（畝状竪堀）」は、「堀切」（空堀）とともに山麓から尾根伝いに侵入しようとする敵の進行を遮断するためにも使用されているのがわかる。

主城Ａの西尾根や石峠方面Ｂの各尾根には、尾根を破壊遮断するために竪堀が設置されている。それらの中には、長さ 50ｍを超える長大な竪堀も確認できる。

これらの竪堀の幅は、概ね約 4ｍのものが多く規格化されているようにも感じられる。岳山城

の構造からは、土造りの山城の究極の防御施設である畝状竪堀を自在に使用する宗像氏の築城技術の一端をうかがうことができる。

（3）主郭部Ａ　（図３）

ア　求心力のある a1

a1 は、山頂（標高 369m）である曲輪 a1-1 を中心に、弓形状に東南並びに西に約 500mに渡って大小約 20 の曲輪から構成されている。A１は、最高地点で各曲輪群が展開する尾根の結束点であり、かつ曲輪群の中でも最も広い駐屯空間を有している。高度、立地、面積において他より優位性を有する。主曲輪である a1-1 は、東西約 50mの曲輪である。曲輪周囲の斜面は切岸が形成され、また、a1-1 東端南斜面下には、僅かに高さ 1m程度の石積みが残っている。なお、山頂より東に一段降りた曲輪 a1-2 は、現在、昭和初期にあった「城山閣」の基礎部分が残り当該施設の瓦が散乱している。この辺りは近代の改変を受けているが、この城山閣の瓦に交じって中世瓦を初めとした遺物が採取される。なお、隣の a1-3 と区画する段差には石垣が確認できるが、「城山閣」建築時のものと考えられる。

イ　北面を意識した防御構造

主曲輪群においては、防御の重点が北側に置かれている。北側には、主曲輪への直接侵入を防ぐ腰曲輪（a1-11、a1-1-2・3、a1-2-2）が設置され、曲輪斜面下には、畝状竪堀の設置が確認される。これは、主曲輪群南斜面は、急斜面となっており、登坂困難な地形となっているのに対し、北側は比較的に傾斜が緩くかつ石峠方面に約 500mに渡って緩やかな尾根が続いており、この方面からの侵入に備える必要があったものと思われる。

このため石峠方面からの侵入を遮断するため、3 条の連続堀切が設置されている。さらに、この堀切から主曲輪北斜面を東西に、総数約 70 条に及ぶ竪堀から構成される畝状竪堀が設置されており、堀切を迂回して斜面から城郭内部への侵入を遮断する構造になっている。

ウ　工夫された城道の取り付け方

西には、10 段の曲輪（a1-6～15）が約 130mに渡って展開する。現在の登山道は、尾根上の曲輪を一つ一つ通過しながら山頂へ向かっている。しかし、西端の曲輪 a1-15 より山頂方面へ曲輪群の南斜面を城道と思われる通路①が約 100mに渡って続き、山頂直下の曲輪 a1-7，8 に繋がっているのが確認できる。曲輪への入口である虎口①は、いずれも単純な平入虎口であるが、通路のある南斜面は、岳山城においても最も急な斜面をなすと同時に、虎口に至るまで約 100mの間は、斜面上に展開する曲輪から始終見下ろされ続ける。

攻城軍は曲輪に配置された守備兵からの攻撃を受け続けると同時に、城から出撃した守備側との戦闘も覚悟しなければならない。城が存在していたときの城道は、曲輪を一つ一つ通過する現在の登山道ではなく、曲輪群の南斜面を通過する通路①であったのではないだろうか。

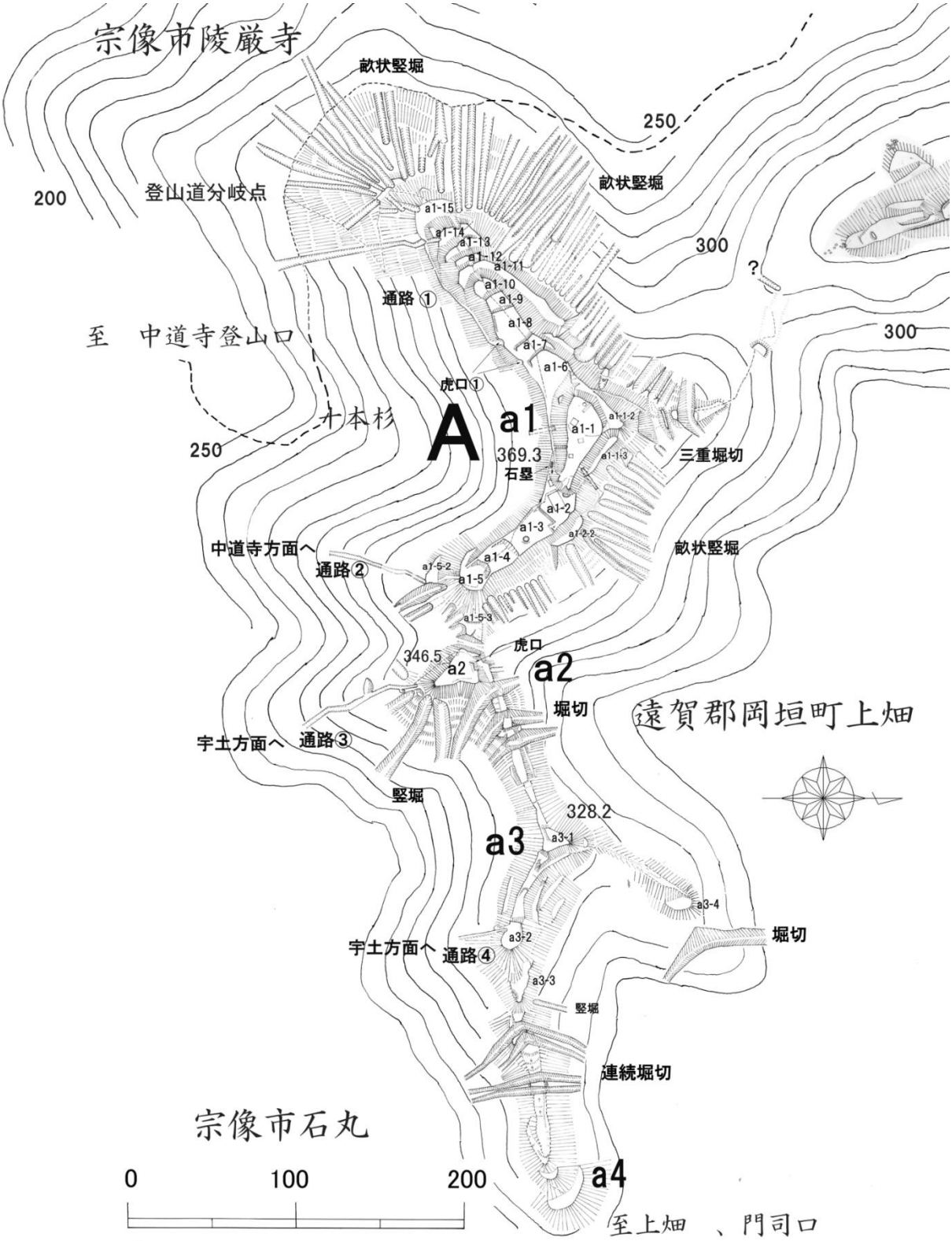

宗像市陵厳寺
畝状竪堀
250
畝状竪堀
200
登山道分岐点
300
?
通路 ①
300
至　中道寺登山口
虎口①
十本杉
A
a1
250
369.3
石塁
三重堀切
中道寺方面へ
通路②
畝状竪堀
虎口
346.5
a2
a2
堀切
遠賀郡岡垣町上畑
宇土方面へ
通路③
竪堀
328.2
a3
堀切
宇土方面へ
通路④
竪堀
連続堀切
宗像市石丸
0
100
200
a4
至上畑　、門司口

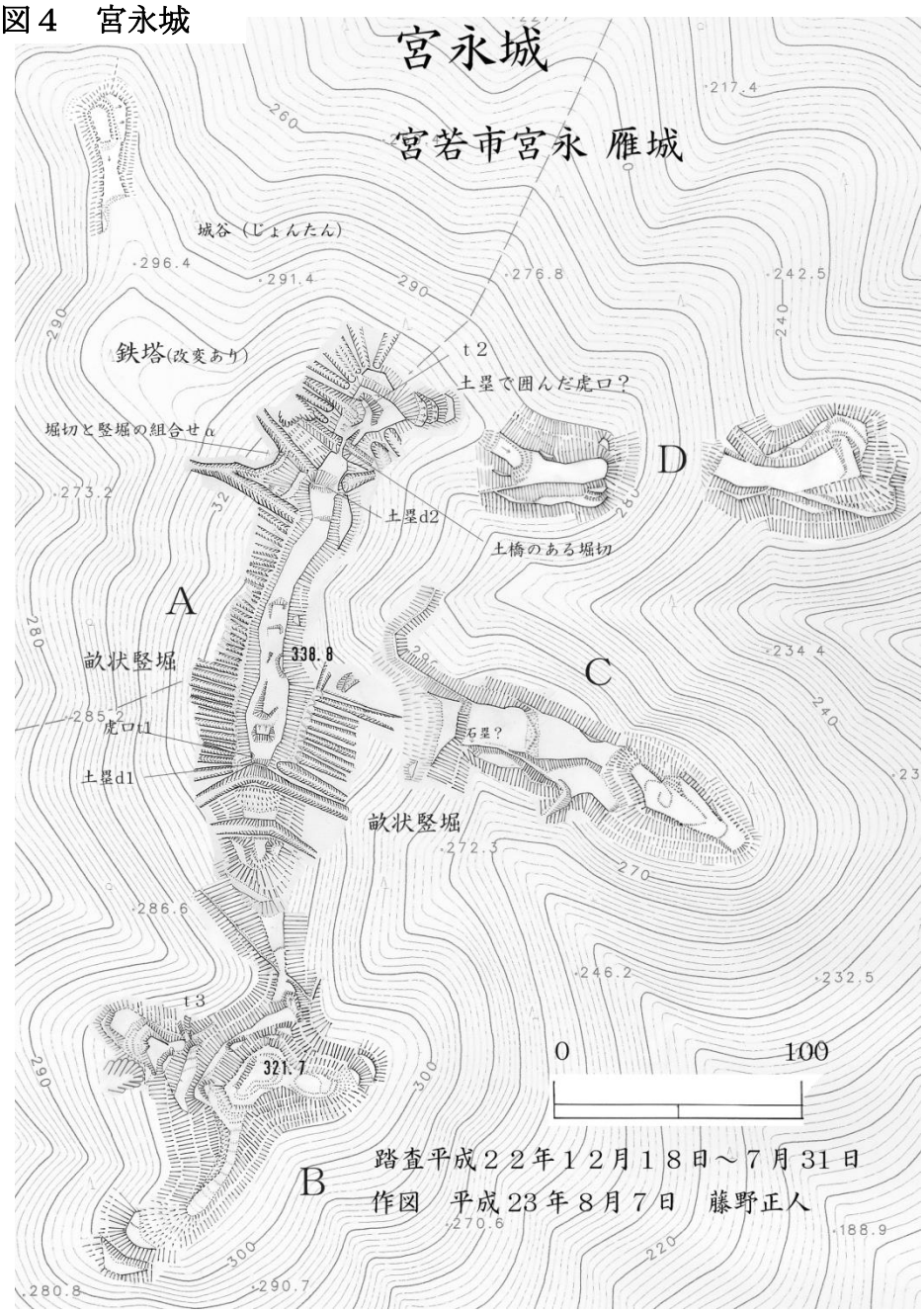
図３　岳山城　主城部分Ａ

エ　山麓を結ぶ通路が集中する a2 付近

「此城の大手は辰己の方うと（宇土）と云所なり」

城の正面を表す大手の「うと」は、城山の東南山麓に小字名で「宇土」「宇戸」として残っている。福岡教育大学の敷地内にある宇土池はその名残であろう。

図４　宮永城



山頂 a1-1 より東南には、約 80mに渡って 4 段の曲輪が確認できる。東南端の　曲輪 a1-5 南下にある腰曲輪 a1-5-2 には、通路②が確認できる。この通路は、現在の登山口がある中道寺方面へ向かっている。通路②においても曲輪の入口は単純な平入り虎口であるが、虎口のある腰曲輪 a1-5-2 と上位の曲輪 a1-5 との間は、比高差約 8m の切岸（人工崖）が立ちはだかり、上位

の曲輪a1-5から見下ろされる位置にある。また、斜面を迂回しようにも北は登坂困難な山頂直下の急斜面であり、南には、竪堀群が設置され移動を阻み、上位の曲輪への侵入を簡単に許さない構造になっている。

さらに、a1-5の東に位置するa2は、主曲輪群a1と堀切で切り離された独立した曲輪である。機能的には、主曲輪群a1の東南大手を防衛する外郭としての役割を担っていた出曲輪と考えられる。同様の出曲輪の設置は、天正9年小金原合戦後改修されたと思われる宗像氏の若宮庄における拠点城郭「宮永城」（図４）の北端においても確認できる。二例しかないが、宗像氏の大手設計思想を示す事例といえるかもしれない。

A2のその形状は、一辺約25mの三角形状の曲輪である。曲輪の縁には、低い土塁が確認できる。これらの土塁は、曲輪周囲を囲む柵や土塀の基礎であった可能性もある。曲輪南端斜面下には、通路③が確認できる。③は、東南尾根上を下る通路であり、『宗像記追考』が記述する大手山麓の小字「宇土」（現、福岡教育大）方面に連絡していたと思われる。同様に宇土方面と連絡する通路は、a2東約150mにある曲輪a3-2においてもが確認できる。（通路④）

a2は、立地的には、前述の大手宇土方面へ連絡する通路と東方門司口へ続く尾根の結束点ともなる重要なポイントでもある。また、門司口方面からの入口となる虎口空間は、当該城郭では唯一小規模ではあるが折れを意識しているのが読み取れる。そして、曲輪内に入る通路は、a1における通路①程長い距離ではないものの曲輪から見下ろされ続ける曲輪斜面下に設定されている。さらに通路②と門司口方面からの通路の間にある斜面には、大きな竪堀が設置されており、攻城軍の連携を防ぐ構造となっている。

出曲輪a2周辺にある山麓からの通路の集中は、『宗像記追考』が記述するように、この方面が城の大手にあたることを示しているのではないだろうか。

オ　門司口方面a3「東の口を門司口と云、」

門司口の地名は、山頂より東方に、岡垣町と宗像市にそれぞれ小字で残っている。門司口の地名の由来は、関門門司方面へ続く道筋という意味であろうか。

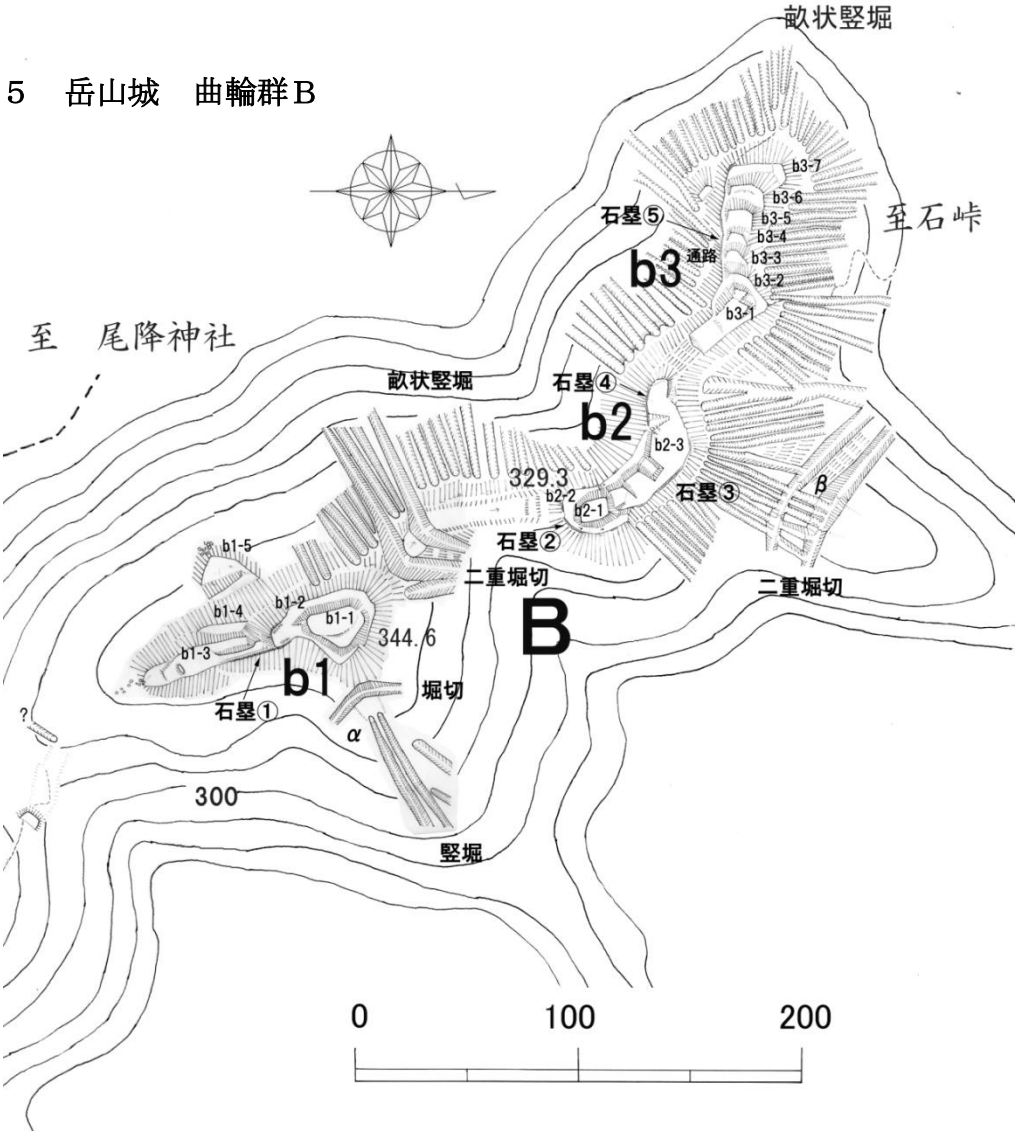
門司口方面は、幅の狭い尾根が東へと続く、南北斜面とも急峻地形をなしている。この方面には、畝状竪堀は確認できないが、地形に合わせた防御施設の設置を見ることができる。尾根の分岐点となる要所には曲輪を造成し、急峻な斜面に挟まれた狭い馬の背状の尾根筋に8条を数える堀切が配置され同方面からの侵入を防いでいる。特にa3-4間には、厳重に4本の堀切が連続して設置されている。

（4）石峠方面外曲輪群Ｂ（図５）

「北の口を石峠の口と云、此石峠の道すこし坦路にして、小荷駄の通ふ路也、氏貞卿御入城ありて、修理をくはへ玉ひ、外曲輪堅固に構へられて、当国無双の城也、」

『宗像記追考』が記述するこの外曲輪に比定されるのが、山頂より北北西約 200m に位置する曲輪 b1（標高 344．6m）を頂点として尾根上に曲輪群が展開するＢである。Ｂエリアは、b1、2、3 からなる南北約 400mに渡るまとまった規模の駐屯空間を有している。Ｂエリアは、主城エリアであるＡより若干高度は下がるものの、標高 340～300mで比較的高低差のない尾根が東西約 500mに渡って続く。さらに、尾根の幅も東の門司口方面に比べると広く、曲輪を造成するのに適した地形である。各曲輪群の曲輪縁には、土留めと思われる石塁の跡（石塁①～⑤）がみられる。中でも b1 の石塁①は、南北約 20mに渡る土塁の基礎になっており、柵や塀の基壇の可能性も推測される。Ｂエリアで特筆すべきは、北端の石峠を見下ろす b3 部分を中心に曲輪下の斜面に約 100 条の竪堀から構成される畝状竪堀が集中配置されていることである。このハリネズミのよう

図５　岳山城　曲輪群Ｂ



に畝状竪堀を厳重に配置した理由はなんであろうか。その理由は、「此石峠の道すこし坦路にして、小荷駄の通ふ路也」との記述にあると思われる。石峠は、現在の金山と城山の間にある宗像郡と遠賀郡を結ぶ峠道である。遠賀郡と宗像郡境の峠道はいくつかあるが、その中では最もゆるやかな峠道である。現在の往来は少ないが、当時は記述のように荷車を引く人馬の通行に最も適していたと推測される。また、石峠の標高は約 160ｍであるが、岳山城の登城口の中で最も高所にあるとともに、最も近い山上の曲輪である b3（標高約 300ｍ）との比高差は、約 140ｍと小さいこと。さらに石峠からの登城路は、標高 240ｍ付近まで比較的緩やかな傾斜になっており、曲輪のある b3 直下（比高差約 60ｍ）まで容易に近づくことが可能である。このように、急峻な山塊に築かれた岳山城においては、石峠口の登城路は攻城軍の攻め口とされる可能性が最も高い岳山城の弱点といえる個所である。従って、当該エリアに夥しい数の竪堀で構成する畝状竪堀を集中配置し、攻め口とされ易い尾根を破壊遮断するとともに、さらに敵が斜面を回り込むことすらできないように尾根周りの斜面にも念入りに竪堀を敷設したといえるのではないだろうか。

竪堀の設置数も b3＞b2＞b1 となっているのは石峠からの侵入を防御の最重点に置いていることの反映だと考えられる。また、Ｂエリアの東端にある b1 において、東のＡ方向に対しては、目立った防御施設が確認できない。このことは、一見独立した城郭にも見えるＢを主城エリアたるＡの従属化に置きたい築城者の意向がうかがえるような気がする。

また、Ｂエリアにおいては、派生する尾根からの侵入を遮断するために竪堀（畝状竪堀）と堀切を組み合わせた手法（α、β）が見受けられる。βは、特に畝状竪堀で尾根を破壊しただけでは飽き足らず、畝状竪堀の上に重ねて二条の堀切を設置するなど念が入っている。これらの竪堀と堀切を組み合わせた手法は、白山城や宮永城においても確認できる。或いは、宗像氏の特徴的な防御技法かもしれない。

（5）遺物について

山頂周囲から瓦、鉄滓（てっさい）、土師器、備前系の陶磁器片等が採取されている。

ア　瓦（図６）

瓦は、山頂より南東に一段降りた曲輪 a1-2 より採取される。岳山城から採取される瓦は少量であるが、一部軒平瓦や軒丸瓦の破片も採取されている。

軒平瓦の瓦当文様は、宝珠唐草文である。軒丸瓦は、軒丸瓦の文様は、三つ巴文であり、切り離し痕は、糸切り離しのコビキＡである。同様の仕様の瓦は、古処山城（秋月氏）、高祖城（原田氏）、安楽平城（小田部氏）、鷲ヶ岳城（大鶴氏）並びに立花山城（戸次氏）等の筑前の有力領主の本城や大友氏の拠点城郭においても採取されている。岳山城の瓦がどのような建物に使用されたのかは、埋蔵されている瓦の量を発掘調査し総合的に判断するしかないが、採取される場所が限定的であり、当時、建物の屋根が板葺きや茅葺きが主流であったことを考えれば、高価であったと思われる瓦の使用は、城内のすべての建物に使用されたのではなく、城内の象徴的な建築物に限定的に使用されたのではないだろうか。特に瓦の採取される曲輪の位置が大手方面にあることから、重厚感のある城門等の施設に使用された可能性も想定される。

イ　鉄滓（てっさい）

鉄滓は、瓦と同じく山頂より東南へ一段下の曲輪 a1-2 から採取されている。鉄滓は、鉄等の金属類を溶かしたときに出る滓である。鉄砲玉や鏃（やじり）等を製作する鍛冶工房等の設置も想定される。

ウ　陶磁器

山頂曲輪周辺からは、備前系と思われる陶磁器片等が採取されている。採取されたものから推定すると甕の破片と思われるものが多く、水瓶等の飲料水や食料を貯蔵するに使用されていたことが想定される。

その他、土師器片なども採取されている。これらの遺物から推定されることは、山上には居住空間とともに小規模とは思われるが武器を造る鍛冶工房などの多様な施設が設置されていたことが想定される。このことは、岳山城において、籠城戦を想定した施設が整備されると同時に山上に常駐する人達がいたことを示していると思われる。

軒丸瓦　2008 年 8 月 31 日

軒平瓦（左）　2008 年 8 月 30 日

軒平瓦（右）　2008 年 8 月 25 日

図６　岳山城　瓦

(6) まとめ

ア　求心力を高める主郭エリア

戦国の乱世を反映するように、宗像氏の本城は、より高くより堅固な山へ移り、宗像氏の支配領域拡大とともに駐屯空間である曲輪の数も増加し、城郭の規模も拡大している。そして、氏貞の権力の強化を象徴するようにその構造も主郭を中心に求心力を高めていく。

片脇城（104m）→白山城（主郭318.8m）→岳山城（369m）

主郭とほぼ同等な高度の独立した曲輪が並ぶ片脇、白山城に比べ、岳山城は明らかに、山頂主郭部が、他の曲輪を従属関係においている。この山頂主郭を頂点に階層化された曲輪群の配置は、氏貞の権力基盤が強化されてきたことを反映しているものとも考えられる。

イ　岳山城の設計思想について

近世城郭の原型となった織豊系城郭において、防御の力点が、塁線の形状や虎口に重点が置かれ、城壁の塁線に折れを持たせることにより側面射撃を可能にする「横矢掛」の使用や虎口の外側に出曲輪を築いて防御力を高めた「馬出し」や入口を鉤型にして、内部に城壁で囲まれた方形空間をつくり、この空間に入った敵を四方から集中射撃を加えることを可能にした「枡形虎口」に見られるように塁線や虎口の進化が見られるのに対し、北部九州の中世山城については、これらの発達はあまり認められない。

しかし、北部九州においては、秋月氏の古処山城（朝倉市）や益富城（嘉麻市　竪堀の数約160条）、豊前長野氏の長野城（北九州市　竪堀の数約200条）に見られるように竪堀（畝状竪堀）の大量使用により曲輪周囲を竪堀で覆い攻城軍を曲輪に近づけないことに力点が置かれる城の存在に注目される。

同じく畝状竪堀を使用する中国地方の城郭について興味深い仮説がある。「この地方の中世山城では、虎口に注意を向ける前に道を機能的に取付ける－道をできるだけ長く取り、その間に上方の曲輪や道から攻撃し続けるように造作することと、切岸を登りにくくするために竪堀（畝状空堀群）を整備する－ことにこそ、まず神経を集中していたといえるのではないか。大胆に省略していえば、とりあえずこの二つで守れる城は造れたのである。」［錦織　勤，1995］

岳山城においてもAエリアの曲輪群に見下ろされ続ける長い山腹の通路①に代表される道の取付け方や、攻城側の侵入が想定される尾根を破壊し、切岸から曲輪内部への侵入を阻む竪堀や畝状竪堀（畝状空堀群）の大量使用から読み取れる岳山城の設計思想は、虎口構造の機能強化よりも、虎口に至る道の設置場所を工夫し、守備側の制圧下に置ける位置に取り付け、曲輪周囲の斜面に畝状竪堀を設置し城郭内部への侵入妨げようとすることに重点が置かれている。これらは、上記の仮説と共通しているように思える。

また、ハリネズミのように過剰なまでに設置された竪堀群からは、関門と博多を結ぶ中間地点にあるこの地域が極度の軍事的緊張状態に置かれていたことを反映しているように感じる。

３．　岳山城城下の様相　（地名から推定される城下　図７）

岳山城と同時期に機能していたと思われる筑前の在地領主の城郭においては、城下に里城や居館の存在が知られている。岳山城下の様相はどのようなものだったのだろうか。

筑前において怡土郡（糸島市）を拠点にした有力領主原田氏の本城高祖城の城下は、『筑前国風土記』から、山麓に原田氏の平時の居館が存在し、その下に長い堀で防御された家臣団屋敷が設定されると同時に、大門や大鳥居口などの城下の入口には、それぞれ門が設置されていたことがわかる。

『筑前国続風土記』　怡土郡　高祖古城

高祖山山頂に在。原田氏代々の居城なり。（略）其麓に、原田氏の常の居宅の跡有。高祖の社よりはるか上なる所なり。村民は御館と云。今は田となれり。其下に堀切あり。其南に上高祖とて、原田氏家臣共の居たりし宅地あり、広し。今は竹林となれり。高祖村の前には、南北に長く堀をほり、取入の要害とせり。其堀今は田と成ぬ。大手の門の在し所を大門と云。今は大門村となりぬ。高祖村は山下にあり。高祖の社より猶下にありて漸下る。村中多は原田家侍の宅なりし故、今も民宅多して、各區別をなせり。廣宅甚多し。故に村中廣し。高祖社の鳥居有し筋に村の入口に、大鳥居口とて、門のありし跡有。（略）

『宗像記追考』

（略）

一　城下に、三郎丸村の内、川端と云所に、大方殿（氏貞母）の御屋敷あり、初は田礼村瀧の口と云処に御座ありけれ共、城よりほど遠ければ、後ここに移り玉へるなり、

（略）

一　赤城　城の麓にあり、岳山の番所なり、城にあらず、

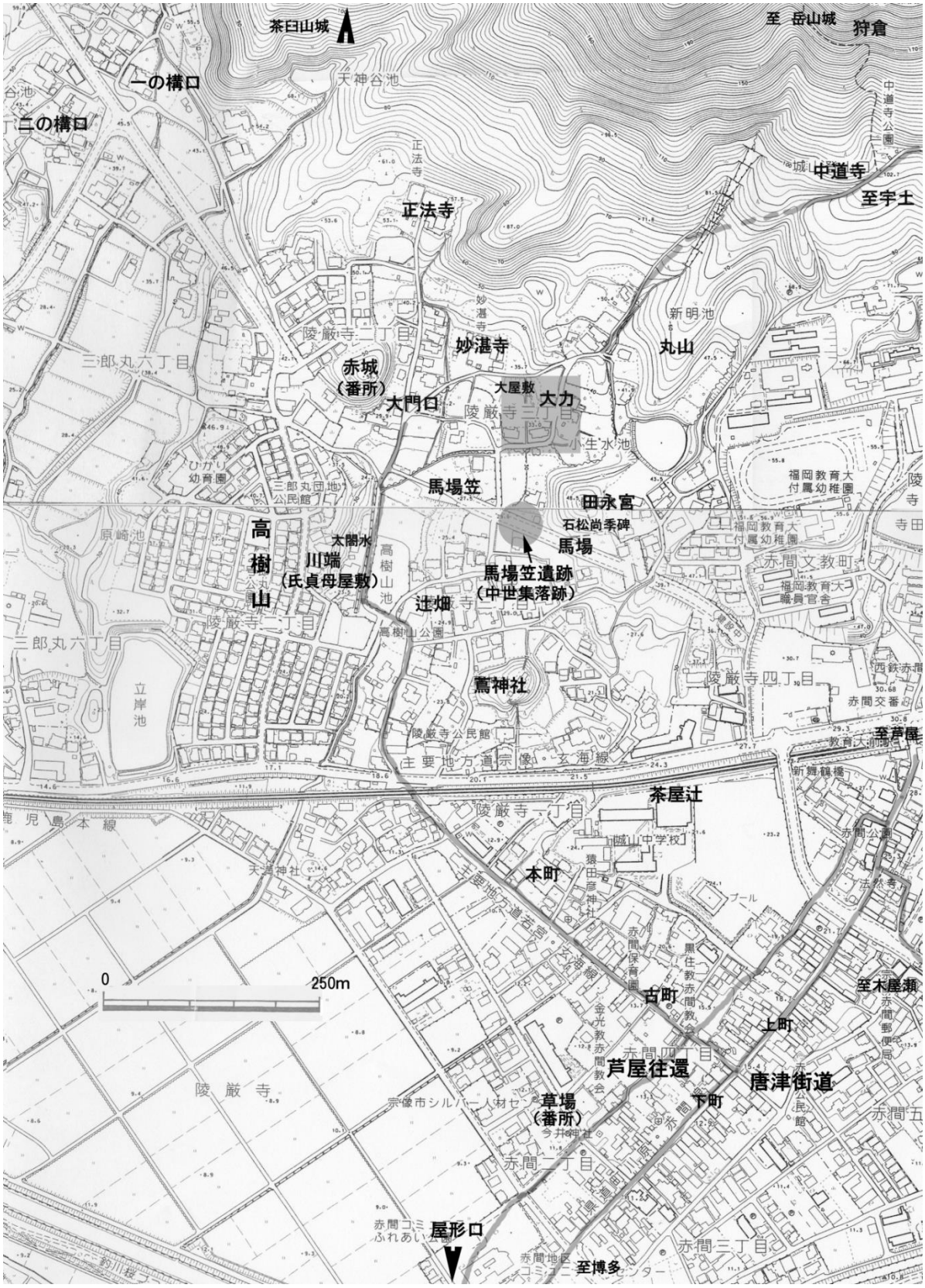
一　城の腰　草場　右の三ヶ所は岳山の麓にて番所なり、（下略）

『筑前国続風土記拾遺』　赤馬山古城

（略）　今も一の丸　二の丸　三の丸　芦屋堀　新堀　馬立場　馬責場　広丸　城道　陣ヶ尾　水落谷　先陣楠　屋形口　大門口等の名残れり、（略）

『宗像記追考』に記述された、岳山城下にあった「赤城」等の番所や氏貞の母の屋敷があったとされる「川端」の地名は小字で残っている。特に「川端」や「赤城」（陵厳寺二丁目、三丁目）付近は、岳山城のあった城山の直下にあり、「大門口」や「馬場」などの地名の他、豊臣秀吉の宿泊伝承がある正法寺や元亀元年（1570）大友氏との和睦の犠牲になった河津隆家の伝承が残る妙湛寺、さらには、氏貞の重臣石松尚季の記念碑や中近世墓が残る田永宮、そして、岳山城築城により、城山山上より当地に移転したと伝えられる蔦神社などがあり興味深い。

図 7　岳山城下図


茶臼山城
至 岳山城
狩倉
一の構口
二の構口
中道寺
至宇土
正法寺
妙湛寺
丸山
赤城
（番所）
大門口
大屋敷
大力
馬場笠
田永宮
石松尚季碑
馬場
高
樹
山
太閤水
川端
（氏貞母屋敷）
馬場笠遺跡
（中世集落跡）
辻畑
鷲神社
至芦屋
茶屋辻
本町
古町
上町
至木屋瀬
芦屋往還
唐津街道
下町
草場
（番所）
屋形口
至博多
0
250m

この辺りは、城山直下の標高約 30mの高地にあり、東は、赤城、造成により消滅した高樹山丘陵（陵厳寺二丁目）が南北に壁を作るように位置していた。また西にはそれぞれ砦を配置できそうな田永宮や蔦神社などの丘陵が位置する。このように東西を丘陵に挟まれた要害の地である。特に、『宗像記追考』が記述する三ケ所の番所のうち「赤城」が他の二か所の番所と区別して最初に記述されているのは、岳山城直下に位置し、他の二か所より城下の核となる重要な地点を押えていたからではないだろうか。

（1）番所「赤城」について

「赤城」は、陵厳寺二丁目の標高 56.5mの丘陵に小字で残る。地元の方の話では、丘陵頂部は昔から平坦な地形であり、北側は現在赤城団地として造成されているが、造成前は、城山に向かって尾根が続いていたらしい。

丘陵南直下を主要地方道若宮玄海線が走る。この道路を挟んで南には、高樹山の丘陵（造成により消滅）があって狭隘な地形を形成していた。また、丘陵東下には、大門口という小字も残っており、大手門のような施設があった可能性も想像される。同様の立地は、岳山城築城前の氏貞の居城「白山城」の城下（宗像市山田）における河原山と山下の門番の位置関係に類似している。「赤城」は、大手門を眼下に見下ろし、城下中枢の入口を押える役割を担った番所であった可能性がある。

(2)「大門口」と大手について

大門という地名は、宗像社辺津宮の守城である片脇城の大手に位置している宗像氏の菩提寺でもある田島興聖寺付近にも存在する。また、『筑前国続風土記』における原田氏の居城「高祖城」の記述においては、「大手の門の在し所を大門と云。今は大門村となりぬ」とある。

これらのことから推定すると、陵厳寺に残る大門口の地名からは、その場所が岳山城の大手口であった可能性を考えることができる。

また、大門口に隣接して東にある寺院「妙湛寺」は、『河津伝記』などによると元亀元年、西郷党の首領、河津隆家が岳山城に出仕した帰路、謀殺されたと伝えられている。これらのことからすると、岳山城への登城口は、ここ大門口を通過し、現在は道がはっきりしないが、登山口がある中道寺、さらに、宇土方面へと続きそこから尾根を登り山上の城郭へと繋がっていた可能性も考えられる。

(3)「馬場笠」「馬場」の地名と「馬立場」「馬責場」

さらに、大門口の南には、「馬場笠」、「馬場」の小字名が残る『筑前国続風土記拾遺』が記述する「馬立場」「馬責場」との関係が気になる。特に大門口を大手門とした場合、隣接して手前に位置する「馬場笠」は、城や館へ向かう客人や家臣の輿や馬を留め置く場所としての馬立場を設置するのに適した位置にある。

（4）城下の館について

前述の原田氏の居城高祖城下において、「(略）其麓に、原田氏の常の居宅の跡有。高祖の社よりはるか上なる所なり。村民は**御館**と云。今は田となれり。(略)」『筑前国続風土記』と記述するように、原田氏は、居城高祖城の麓に平時の居館を設置している。同様に、国指定史跡となった

筑紫氏の「勝尾城下遺跡」（佐賀県鳥栖市）からも居城である山城の麓に館が確認されており、当時の北部九州の有力領主は、山城の麓に居館を有している可能性が高い。

『宗像記追考』には、氏貞の居所についての記述はないが、興味深い地名として、付近に「大屋敷」と「大力（だいりき）」という隣接し合う地名が残る。

「大屋敷」は、妙湛寺の南東にあたる通称名である。現在は、畑になっている。この地名については、他の城郭の参考事例として福岡市東区、新宮町並びに久山町にまたがる立花山城がある。柳川藩立花山城絵図には、山麓に建物はないが三反余と添え書きされた大屋敷の広い敷地が描かれている。周囲には、侍屋敷が点在しており、その中心に位置する「大屋敷」は城主居館敷地を想像させる。現在も粕屋郡新宮町立花口の立花山登山口には、「大屋敷」の地名が残っている

さらに、「大屋敷」の東には、隣接して「大力」という小字が残る。小字の範囲は、隣接する「大屋敷」と合わせれば、大よそ一町四方の方形の区域である。大力付近は、周囲の平地より一段高い地形になっている。「大力」の地名については、長い年月の間に地名が変化した可能性は考えられないだろうか。

佐賀県内の城館調査を行なっている教育庁の担当者より教示頂いた話によると、「館（たち）」→「太刀（たち）」→「大力（だいりき）」と地名が変化した事例もあ　るとのこと。

地名で残る「大屋敷」や「大力」付近は、大手門が想定される大門口より岳山城の大手登城口である「宇土」方面へ向かう途中にあり、山麓の居館を設置するのには、適地と考える。岳山城下における氏貞の居館の有力な候補地になるのではないだろうか。

（5）馬場笠における発掘調査について

「大力」の南に位置する小字「馬場笠」において、宗像市の発掘調査により中世集落の遺構も確認されている。[宗像市，2008]

2005年の第一次調査においては、整地時に地鎮具として埋められた可能性がある中国から持ち込まれた「開元通宝」「政和通宝」などの唐から宋代にかけての銅銭が出土している。

2006年の第二次調査においては、二期の遺構面から、堀立柱建物、柵列、土壙、溝、井戸などの遺構が検出されている。そして、土師器、瓦質土器（火鉢）　国産陶器（備前焼の大甕、三耳壺）　輸入陶磁器（油滴天目椀）等の遺物が出土している。検出された中世集落は、出土遺物などから13世紀後半から15世紀前半にかけて営まれたのち、16世紀になり大規模な整地が行われ再び利用されたと考えられている。特に大規模な整地が行われ再利用された16世紀は、宗像氏貞が、岳山城を修築し本城とした時期とも重なっており城を整備すると同時に城下も整備した可能性も考えられるとしている。

（6）番所「城の腰」と「草場」について

城下には、「赤城」の他にも、「城の腰」と「草場」の二ケ所の番所があったと伝えられている。いずれも交通の要地を押える位置にある。

ア　城の腰

岳山城の東南約1.5㎞の石丸に小字で残る。西約200mに北九州と福岡を結ぶ国道3号線やＪＲ鹿児島本線が走る。北東は、城山峠を越えて遠賀郡に至る。「城の腰」の北約600mには、

古代駅跡と推定される「武丸大上遺跡」がある。「城の腰」は、博多方面より大上遺跡を経由して城山峠を越え遠賀郡へ向かう古代官道のルート上にあったと思われ、中世においてもこの道路は活用されていた可能性がある。江戸時代の唐津街道より、西にやや迂回し緩やかに城山峠を越えるこのルートは、或いは博多と芦屋を結ぶ当時の主要道路だったことも考えられる。また南には、釣川が東西に流れ、川に沿って東の上流には猿田峠を越えて鞍手郡鞍手町へ抜ける幹線道路も走る。この道路は、唐津街道赤間宿と長崎街道木屋瀬宿を結ぶ道路（中筋往還）を踏襲している。峠を越えて鞍手の平野部に至る入口には、宗像氏の家臣野中氏の伝承が残る腰山城（鞍手町新延）もあり、この道路は、恐らく中世においても鞍手郡を結ぶ重要な交通路だったと予想される。「城の腰」は、これらの遠賀郡と鞍手郡を結ぶ交通の要衝を押える役割を担っていたことが考える。

『宗像市史』［宗像市史編纂委員会，1999］によると、「20m×30mほどの平坦地があり、周囲には空堀、土塁並びに曲輪と覚しき遺構がある。」との記載があるが、その後の造成により消滅しているようである。

イ　草場

岳山城の南約1.7㎞唐津街道赤間宿のやや西、今井神社付近（赤間二丁目）に小字で残る。

当時を偲ぶ遺構はないが、付近は、街道より大門口方面へ続く道（現在の主要地方道若宮・玄海線）の分岐点ともなる交通の要衝である。また、当時は、重要な水上交通路であったと思われる釣川にも近く、西方の赤間宿の構口があった、釣川付近に領主居館への道路を示す可能性がある「屋形口」の小字も残る。気になるのが、唐津街道の西に平行して走る「芦屋往還」の存在である。「芦屋往還」は、草場付近を通過している。［赤間地区歴史・観光ガイドブック編集委員会，2005］唐津街道より古い道路と思われる「芦屋往還」と城下の中枢と推定される大門口方面を結ぶ道路が交差する位置に「古町」という地名が残る。江戸時代に唐津街道が整備され赤間宿ができる以前の赤間の様相は詳らかではないが、地名が物語るように「古町」は、赤間に町場が形成された初期の場所をあらわしている可能性がある。宗像氏貞が岳山城を居城としたときに赤間に町場が形成されていたかどうかは不明ながら、番所としての「草場」は、博多と芦屋を結ぶ当時の主要道路「芦屋往還」の道路上に位置し、城下の流通や交通を押える関所のような役割を担っていた可能性が考えられる。

（7）城下の様相

以上、地誌や小字等の地名そして発掘調査の結果等から考えると、「赤城」や「大門口」などの岳山城南山麓の台地上にある陵厳寺付近は、城下の中枢を担った地域であり、「大力」や「大屋敷」の地名からは、城主居館があった可能性が考えられる。その様相は、領主館の周囲に寺社等の宗教施設や一族や家臣等の屋敷を配置した景観が想定される。また、「城の腰」や「草場」の番所は、城下を走る当時の主要な道路を押える交通の要地にある。特に城下の中枢部分と「芦屋往還」を結ぶ地点にある「草場」付近は、岳山城の城下において、領内各地を結ぶ交通路が集中することから、人の往来や物資の流通、集積があったことが想定される。或いは、後に唐津街道赤間宿の基となる町場が存在した可能性も考えることができるのではないだろうか。岳山城下は、町場を

も含むものであったのかどうか。現時点では、材料が不足しているが、興味がつきない。

４．岳山城の支城配置（図８）

周辺の城砦の位置を地図に落としてみると、一見散在しているようにみえる城砦が、岳山城を起点に同心円上に配置されていることがわかる。すべての城砦が岳山城と同時期に機能していたかどうかははっきりしないが、その配置からは、本城である岳山城並びに城下を防衛する目的で連携し合う、群として機能する城砦の姿が想像される。

（1）１km圏内

① 茶臼山城　（三郎丸字一の構え口）

岳山城の西の山腹にある地元では、弥勒山と呼ばれる標高１５０メートルの山頂周囲並びに尾根に曲輪が確認できる。山頂周囲には、土塁が廻る帯曲輪遺構あり。小字一の構口との関係が想定される。

図８　岳山城周辺城砦図

② 三郎丸土塁　（三郎丸）

南北約 200m の堀を伴う土塁が残る。付近は道路や宅地造成により改変されている。改変前はさらに長かったことが想定される。延長線上に「一の構口」「二の構口」の小字あり。詳細は不明ながら、岳山城の城下集落を囲む惣構えとしての施設か。或いは、大規模な軍勢の駐屯地を形成する臨時構築の陣の遺構の一部であった可能性も考えられる。

③ 赤城　（陵厳寺）番所

（2） ２㎞圏内

④ 城ノ腰（石丸）番所

⑤ 草場（赤間）番所

⑥ 今井城（三郎丸）

造成により遺構は消滅か。「今井城」の小字が残る。現在の翁社の場所に比定されている。小樋氏との関連が推定される。

⑦ 高尾（三郎丸）

赤間西小学校の東南、標高 95.7m の山上に位置。狼煙台か。

「宗像市遺跡等分布地図」 [宗像市教育委員会, 2011]にあり。

⑧ 平等寺城（平等寺）　図９

別称草場城。岳山城の北、弥勒山と呼ばれる金山より西に派生した長い尾根上に選地。金山に繋がる部分を連続する堀切で遮断している。西の標高 216.2mと東の標高 237.2mの二つのピークを中心に曲輪が東西約 200mに渡って展開する。石峠を押える位置にある。

⑨ 上山堡（平等寺）

『筑前国続風土記拾遺』草場古城に記載されている。比定される場所として、金山北岳の東に削平地が確認できる。遠賀方面の視界に優れていたと思われる。

（3） ３㎞圏内外

⑩ 須恵城（須恵）

方一町余の土塁で囲まれた方形区画があったとされる。居館跡か。遺構は、造成により消滅したものと思われる。

⑪ 城鎮（曲）

小字で「城鎮」という地名が残る。『宗像市史』 [宗像市史編纂委員会, 1999] に城の遺構らしきものありと記述されている。

⑫ 田久城（田久）

城棒（ヂヤウガボウ）。石松氏との関係が推定される。南に唐津街道が東西に走る。

⑬ 名残城（徳重、名残）　図 10

別称　縁（ヘリ）城　標高 107.4mの山頂主郭の周囲を帯曲輪が巡る。岳山城から望むと若宮庄の拠点城郭宮永城との間にあり、南麓を若宮玄海線が走る。また、鞍手郡との境である赤木峠にも近い立地であり、鞍手方面の押えとして機能したものと考えられる。

⑭　冨地原城（冨地原字銭垣）

「宗像市遺跡等分布地図」［宗像市教育委員会，2011］にあり。北に木屋瀬方面を結ぶ中筋往還が東西に走る。北西麓に犬追物との関係が考えられる「犬馬場」の小字あり。付近は、神屋氏の伝承が残る。

図 9　平等寺城

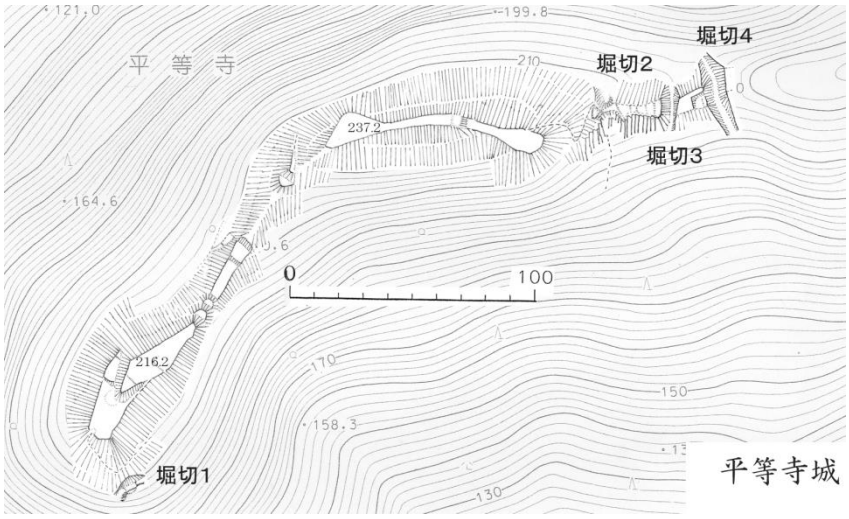
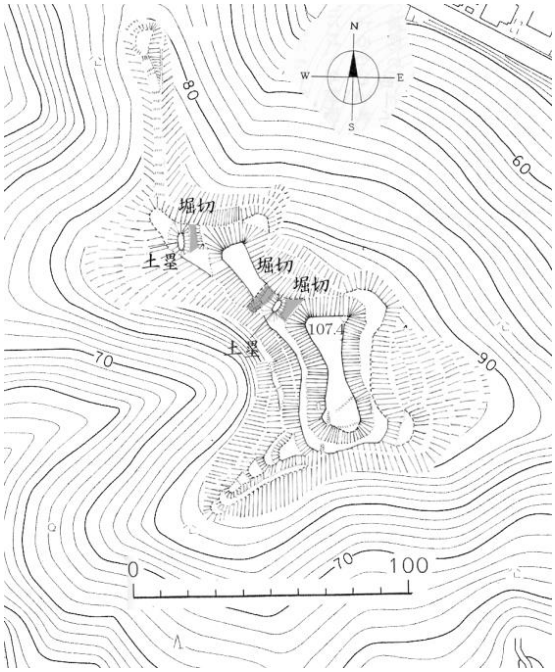


図 10　名残城



５．宗像氏の城郭配置（群として機能する城砦　図 11）

A.　本城「岳山城」を中心とした城砦群
　　領国経営の拠点赤間庄を防衛する

B.　片脇城（図 12）を中心とした城砦群
　　宗像社信仰の中心辺津宮（田島）を守る

C.　許斐岳城（図 13）を中心とした城砦群
　　対大友氏（立花山城衆）を見据え、西方防衛ラインを形成する

D.　浦島の城
　　小規模城砦で防御施設に欠けるが、いずれも海域監視に適した立地条件を有する。水軍（警固衆）との連携が考えられる。

宗像氏の支配領域内の城郭分布からは、城郭が、糟屋郡と接する領内の西側に集中しているのがわかる。これは、敵対勢力である立花山城の大友勢力を意識しているものと考えられる。
また、畝状竪堀を使用する城郭は、本城（岳山城、白山城）と敵対勢力と対峙する軍事的緊張状態の高い地域の拠点城郭（片脇城、宮永城、許斐岳城）に見られる。大友氏の立花山城督戸次氏

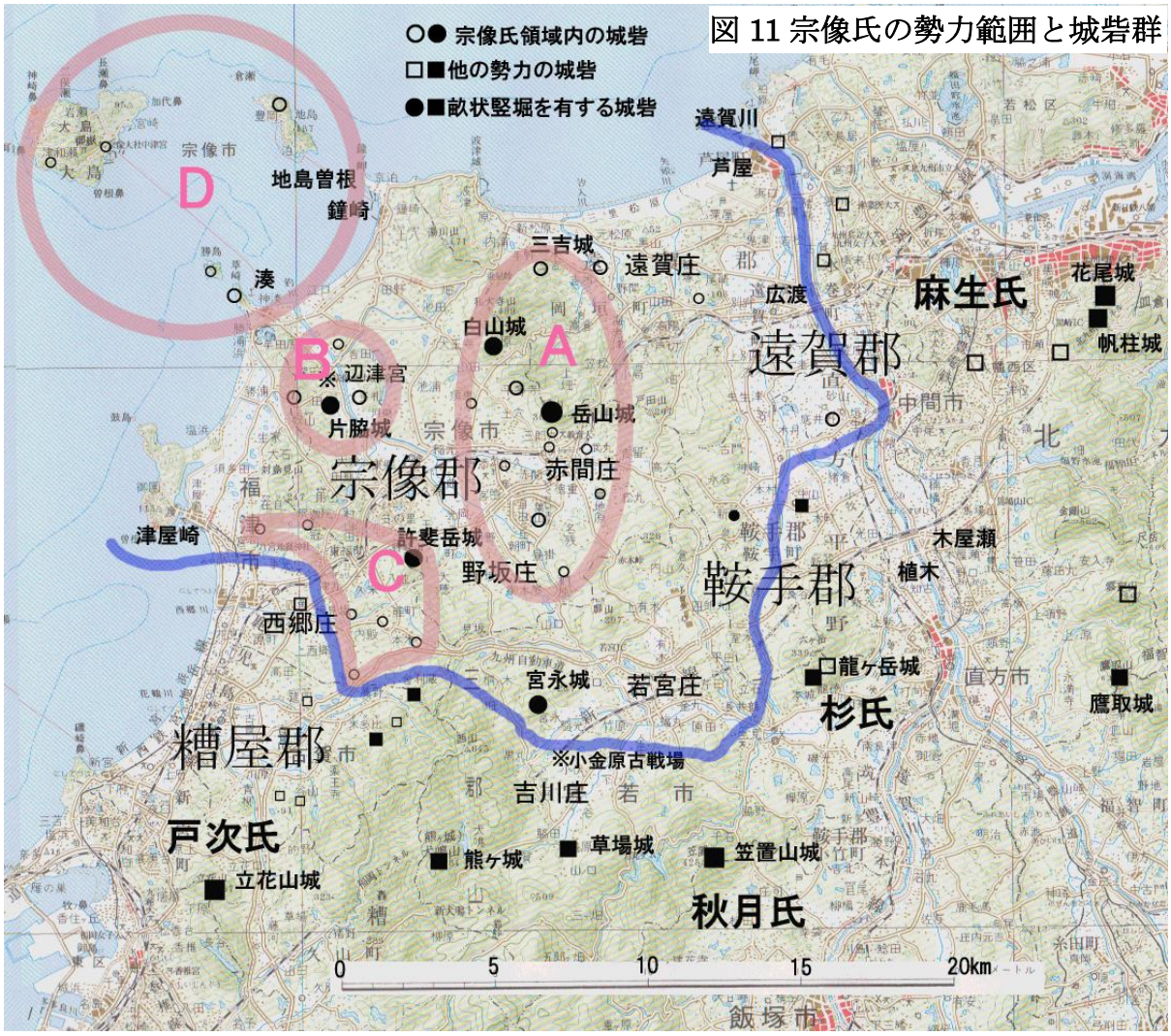
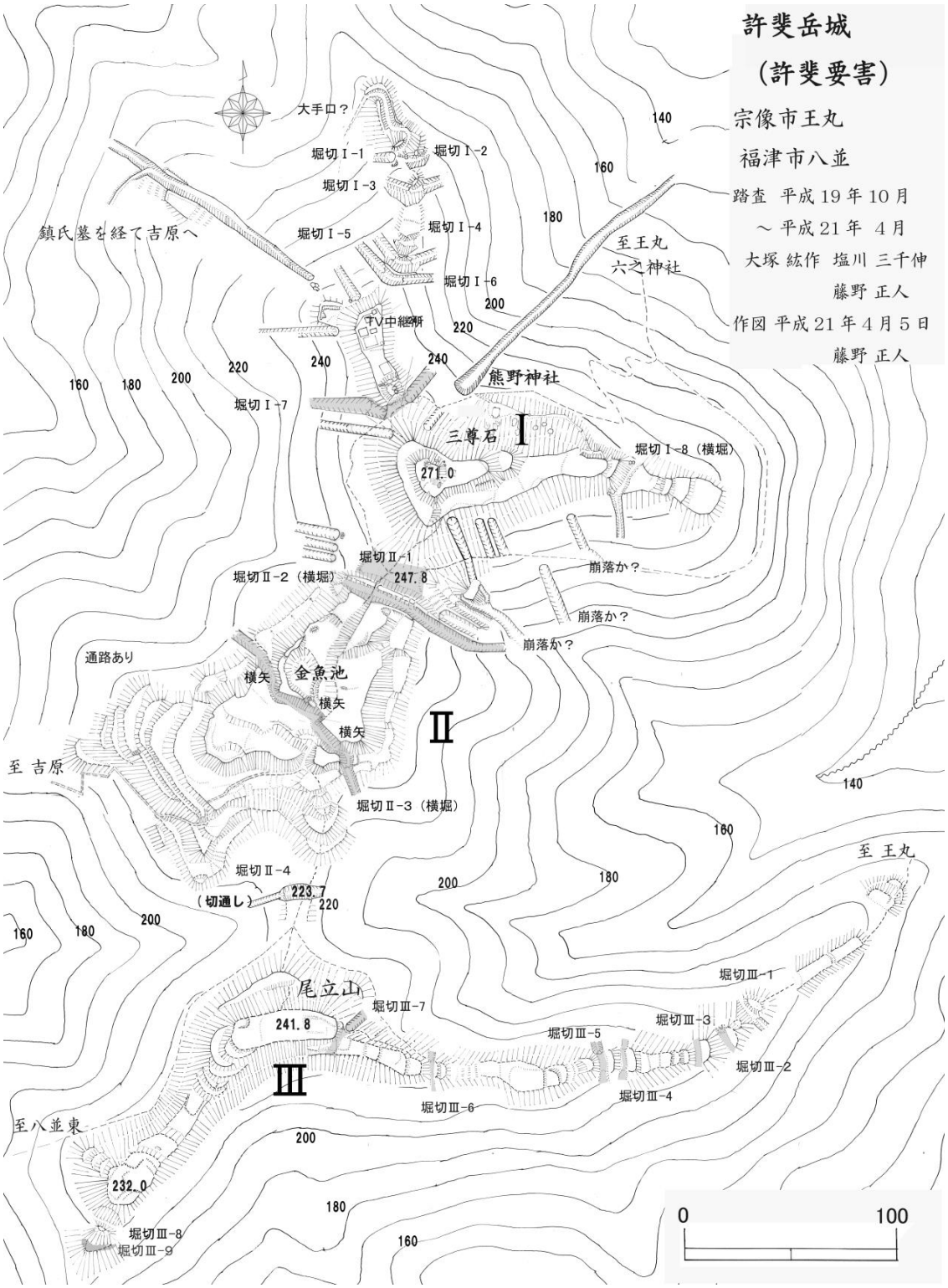


図 11 宗像氏の勢力範囲と城砦群

と交戦状態となった天正九年小金原合戦（清水原合戦）直後、戸次氏に宮地岳城（福津市宮地岳）が奪取されると、許斐岳城とともに、片脇城と宮永城は戸次氏の侵攻に対する防衛の要となった。

図 13　許斐岳城



６．まとめ（岳山城築城の意義）

(1) 赤間庄蔦ヶ岳へ本城を定めた理由

ア　拡大した支配領域の経営を視野に入れた選地

宗像氏貞を擁立した大内義長は、政権の中枢を担った陶晴賢が、功治元年（1555）厳島の合戦で毛利元就に敗死して以降、急速に勢力が衰える。功治三年（1557）毛利元就に追い詰められた義長は、長門勝山城で自害し大内氏は滅びる。

宗像氏貞は、上級権力者であった戦国大名大内氏の没落とともに、自立し、大内氏の旧領へ進出。自らも戦国大名を志向し支配領域を拡大した。その支配領域は、宗像郡一円、遠賀・鞍手郡の一部にまで拡大した。なお、領域の拡大は、また、高倉宮（遠賀郡岡垣町高倉）を信仰する遠賀庄など宗像社の信仰圏ではない地域への拡大も含まれている。岳山城は、遠賀郡と宗像郡の境でかつ鞍手郡に近い宗像郡の南部に位置している。支配領域のほぼ中心に位置し、その支配領域のほぼ全域を視界に収めることができる立地からは、伝統的な基盤のある宗像郡のみならず、遠賀、鞍手へ拡大した領域経営を視野に入れた選地であることがわかる。

①　麻生氏の支配した、遠賀庄（遠賀川西岸）への進出

水上交通が主流であった中世において、「遠賀川」は、筑前北部における物流の大動脈であった。また、遠賀川の河口に位置する「芦屋」は、遠賀川流域の物資の集積地として重要な港湾であった。遠賀川西岸地区は、岡城（岡垣町吉木）を拠点とする麻生隆守の支配下にあったと思われるが、隆守の没落と同時に宗像氏が進出する。

②　大内氏の没落とその直轄領であった鞍手郡若宮庄への進出

遠賀川の支流犬鳴川流域にある若宮盆地は、肥沃な穀倉地帯である。大内氏の時代、鞍手郡は大内氏の直轄領として、その郡代の支配するとこであった。宗像郡であった、赤間庄や野坂庄も鞍手郡に編入され大内氏の郡代の支配するところであったが、大内氏の没落とともに宗像氏貞は鞍手郡へ進出する。

③　河津氏を初めとする大内旧臣（西郷党）の宗像氏への帰属

西郷川流域の西郷庄は、平地の少ない宗像郡内で貴重な平野を形成している。大内氏の時代、西郷庄は、赤間庄や野坂庄が鞍手郡に編入されたのと同様に糟屋郡に編入され、大内氏の筑前守護代が置かれた高鳥居城（粕屋郡須恵町、笹栗町）の城領が設定されている。大内氏の滅亡とともに、宗像氏貞は、河津氏を初めとする高鳥居城衆を家臣化する。

イ　交通の要衝「赤間庄」

城下は、水上交通路であったと思われる釣川の中流域にあり、下流にある宗像社信仰の拠点である辺津宮のある田島、さらには海へと水路により連絡していたことが想像される。また、陸路においても博多と芦屋を結ぶ唐津街道の前身となる「芦屋往還」が走る。そして、城下より東の釣川上流へは、猿田峠を越えて遠賀川中流域の水陸の交通の要衝、鞍手郡「植木」（鞍手町）「木屋瀬」（北九州市八幡西区）を結ぶ道路が走る。さらに、南には、現在の若宮玄海線に沿って鞍手郡若宮庄を結ぶ道路もあったと推定される。岳山城下は、領内各地を結ぶ道路が交差する交通や流通の要衝であった。

ウ　堅固な城砦の必要性（峻嶮な天然の要害、「蔦ヶ岳（城山）」）

大内氏滅亡後、永禄二年（1559）筑前国守護職に補任された北部九州の巨大な戦国大名大友義鎮（宗麟）にとっては、新た領国となった筑前において支配領域を拡張する宗像氏の動きは見過ごすことはできなかったのではないだろうか。同年大友氏を後ろ盾とした宗像鎮氏の侵攻により、宗像氏貞は、玄界灘に浮かぶ大島への避難を余儀なくされた。翌年、毛利元就の後援を得て鎮氏の拠る許斐岳城を奪回するも、その後も連年のごとく大友氏との戦いが継続する。このような軍事的な圧力を受ける中、大軍の攻撃にも耐えうる城郭の必要性が生じたと思われる。特に、九州における戦国史上最大の戦いともいえる永禄十二年（1569）毛利氏と大友氏との立花山城を巡る攻防戦において、（この戦いにおける両軍の兵力は、各々四万とも五万とも言われ、毛利氏は、山陰、山陽の諸国から、また、大友氏は北部九州五か国から軍勢を動員した総力戦であった。）氏貞は毛利氏に与し糟屋郡との境に近い飯盛山城（福津市内殿）に陣をとった。その間、宗像郡内は大友氏の侵攻を受けるものの、岳山城には、氏貞母が在城し指揮を取っていることが『宗像第一宮御宝殿置札』に記されている。［桑田和明, 2012］　そして、大友毛利両軍の長い対陣の後、大友氏の支援を受けた大内輝広の山口侵入により、毛利勢は北部九州より撤退する。大友の軍勢は、毛利勢を追撃し岳山城下に陣を取ったことが同置札よりわかる。毛利氏の後援を失い孤立した氏貞は、窮地に陥るが、領民や家臣の家族を玄界灘に浮かぶ大島、地島へ避難させ、自身は、岳山城に籠城し抗戦の構えをとる。大友氏による岳山城攻撃は行われず、氏貞は、実相院益心と石松対馬守尚宗を使者として和睦の交渉に当たり、最終的に西郷庄などの領地の一部を手放すことにより大友氏との間に和睦することに成功する。このように大友の大軍を前にして、援軍を求める相手もいない不利な状況の下、和睦を成立させた要因の一つには、堅固な要害に仕上げられた岳山城が大友氏の攻撃を躊躇させたことも考えられるのではないだろうか。誇張はあるかもしれないが、『宗像記追考』が岳山城を「当国無双の城」と記しているのは、この城が宗像氏の窮地を救ったことを表しているのではないだろうか。

『宗像第一宮御宝殿置札』

豊刕御分国之人数（大友勢）、猶以馳来、杉山（香椎宮西南丘陵）仁打出、同五月二日名子山（新宮町三本松山（名児山）、久山町山田字名子山）ニ陳取之、芸陳（毛利陣）之前後差搦、同四五両日、当郡境目少々放火、陳中与郡内与不通也、岳山々下迄、雖成路、　大方殿様（氏貞母）有御在城、　御下知無緩故、同六日如本陣相加（略）

岳山事、誠一国一城雖為躰、離社地可就他国土事、神明仏陀之冥鑑難遁之由、依　上意、不傾于他一人、公私御在城之処、三箇日之後、豊家之諸勢（大友勢）、当城山下仁執近陳、送数日、可挫催雖為必定、城内堅固事、恰巨霊神以守固太華山、至大島・泊島、御家人妻子勿論、郷民数千人、取渡無恙之、終自豊陳（大友）、和睦之大望在之（略）

（2）機能分化する拠点（信仰の中心地「田島」と軍事行政の中心地「赤間」）

『筑前国続風土記』田島

「宗像大宮司宅は、田島村の境内、本社の南に在。方百餘間。其跡今は田となれり。是大宮司中世より代々の宅地也。近世の氏男迄は此所に住む。氏貞の時兵乱を恐れて、常には

赤間の蔦が岳の城に住し、祭礼の時のみ此宅に来りしとかや。」

『宗像記追考』

「大宮のうしろに氏貞卿の別業あり、その所を世の人は御内と號しけり、かりそめなる御屋形ありて、神事祭礼の時は、此所に御座ありけり。神事の時、御休息所なり」

『筑前国続風土記』や『宗像記追考』の記述にあるように、宗像氏は、宗像社の信仰の中心「辺津宮」のある田島に「御内」と呼ばれる大宮司居館を代々の居館としていた。付近には、辺津宮の守城の役割を担う「片脇城」を初めとする城砦群があり、また、宗像氏の菩提寺「興聖寺」も存在する。

このように、田島は、宗像氏にとって信仰のみならず、軍事や行政の伝統的な基盤としてきた地であった。宗像氏貞が居城を赤間庄にある岳山城に定めたことは、伝統的に基盤としてきた田島から軍事・行政機能が赤間庄（岳山城）へ移転した事を意味している。このことは、宗像宮信仰を通じて社領を経営する宗像社の大宮司から、上級権力者であった大内氏の滅亡により、自立し自らも戦国大名を志向し宗像社の信仰圏を超えて支配領域を拡大する宗像氏貞の姿を見ることができる。

(3)「宗像大宮司天正十三年分限帳」による家臣数（表１）

分限帳は、宗像氏貞の死去する前年天正十三年（1585）の家臣団の所領を記述したものとされるが、「宗像神社史」により史料批判されており、知行面積の信憑性が疑われている。しかし、記述されている家臣数や地域ごとの衆の単位は、氏貞期の家臣団の一端を知る参考になるのではないだろうか。表は、家臣の数を衆ごとに比較したものであるが、「遠賀庄衆」、「赤間庄衆」、「若宮衆」の人数が群を抜いている。ただ、「遠賀庄衆」や「若宮衆」の所在した地域が、「遠賀庄」が現在の遠賀郡岡垣町、遠賀町、芦屋町、並びに中間市を含む地域であり、「若宮庄」が現在の宮若市の過半を占める地域を一括りにしており、他の衆の地域より著しく広い範囲に及ぶことを考えれば、家臣が一番集中している地域は、赤間庄である。赤間庄衆の中には、奉行である石松対馬守や小樋対馬守の記載もあり、政権の中枢を担う重臣も所在している。このことは、岳山城下赤間を軍事、行政の拠点としたことにより家臣団の城下集住がある程度進んでいたことを示しているのではないだろうか。

また、前述の「遠賀庄衆」、「若宮衆」を除けば次に家臣数が多いのは、「田島衆」である。辺津宮のある田島は、軍事行政の拠点が岳山城のある赤間庄に移転した後も、依然として信仰の中心であった。

田島の諸小路と宗像氏の家臣の屋敷などの数などが記載されている「天正二年田島諸小路屋敷帳」（天正二 年（1574）に宗像社の図師が作成し、寛文二 年（1662）に深田秋続が書写）からは、石松対馬守、小樋対馬守等の赤間庄衆や田島以外に居住していた主要な家臣も、田島周辺に屋敷を所有していたことがわかる。［花田勝広,　2012］

『筑前国続風土記』などが記述するように、氏貞は、岳山城を居城としつつも、宗像社の大宮司として祭礼の時には、田島の大宮司館「御内」に滞在している。「天正三年諸小路屋敷帳」に見られる主要な家臣団の屋敷の存在は、氏貞の田島滞在に伴い、家臣団も氏貞に従って、田島に同

行していたことを示しているものとも考えられ、軍事、行政の機能を失ってもなお宗像社信仰の中心として求心力を持ち続ける田島の姿が垣間見られる。

表 1　宗像大宮司天正十三年（1585）分限帳に見る家臣団

	分限帳に記載された衆	人数	構成比（%）
1	遠賀庄衆（遠賀郡）	89	19.2%
2	**赤間庄衆**	**85**	**18.3%**
3	若宮衆(鞍手郡)	84	18.1%
4	**田嶋衆**	**39**	**8.4%**
5	野坂庄衆	26	5.6%
6	村山田郷衆	15	3.2%
7	上八村郷衆	15	3.2%
8	東郷衆	14	3.0%
9	本木郷衆	14	3.0%
10	奴山郷衆	10	2.2%
11	池田郷衆	9	1.9%
12	田野郷衆	8	1.7%
13	河東郷衆	8	1.7%
14	河西郷衆	8	1.7%
15	山田・平等寺衆	7	1.5%
16	曲村衆	7	1.5%
17	宮地郷衆	6	1.3%
18	山口・宮永衆（鞍手郡）	4	0.9%
19	大穂・光岡衆	4	0.9%
20	土穴・須恵衆	3	0.6%
21	大嶋衆	2	0.4%
22	久原村衆	2	0.4%
23	勝浦村衆	2	0.4%
24	室木村（鞍手郡）	1	0.2%
25	内殿郷	1	0.2%
26	在自郷	1	0.2%
	計	464	100%

※　　御中間衆、御雑色衆、御厩衆、寺は、除く

※その他　城の整備を負担する家臣

○「新撰宗像記考證」　宗像氏重臣連署奉書写

宗柏事、近年当郡令逗留、別而懇意之覚悟、殊政所片御取替無尽期馳走、誠雖被成　御祝着候、□乱後御繁多、数ヶ年相滞云々、爰御闕所之地在之条、暫時被預置度御気色之折節、息加冠大望候間、被任彦五郎貞続候、尤珍重候、仍右闕所地遠賀庄山田郷内四町坪付別帋在之事、被成御扶助畢者、従天正五七ノ六有全知行、社武役勿論御城屏等可被遂其節候、次昼夜之奉公并旅役之事、被閣候、但於御出陳者、似合之儀于時可被仰出之由、相心得能々可申旨候、恐々謹言、

（天正五年）七月六日

（小樋）秀盛
（高向）良秀
（石松）尚宗
（吉田）良喜
（吉田）重致

大森宗柏入道殿

上記文書からは、家臣に所領を宛がうその対価として、社武役（宗像社に対しての負担である社役と武家領主宗像氏に対する奉公である武役）の負担を求めていることがわかる。と同時に「御城塀」と記述されているのは、御城は、公の城である岳山城と推定され、塀は、塀の設置すなわち城の整備への負担を求めていると思われる。

このような整備や維持管理は、宗像氏の多くの家臣に義務づけられていたことが想像される。

参考並びに引用文献

(1) 宗像神社復興期成会　『宗像神社史』下巻　1966
(2) 錦織　勤　「中世における山城築城技術の進歩について」
『鳥取大学教育学部研究報告 人文・社会科学』 第 46 巻 第 1 号 1995
(3) 宗像市史編纂委員会『宗像市史』史料編第二巻　中世Ⅱ　1996
同　『宗像市史』通史編第二巻　古代・中世・近世　1999
(4) 桑田和明　『中世宗像氏と宗像社』　岩田書院　2003
(5) 赤間地区歴史・観光ガイドブック編集委員会　『つたがたけ』　2005
(6) 河窪奈津子　「『宗像記追考』が語る宗像戦国史の虚実」
『福岡県地域史研究』24 号　2007
(7) 宗像市　『陵厳寺馬場笠』宗像市文化財調査報告書第 60 集　2008
(8) 山口　浩　『新版　ふるき三郎丸のすがた＝福岡県宗像市三郎丸（旧村・大字）＝』2010
(9) 宗像市教育委員会　『宗像市遺跡等分布地図』　2011
(10) 河窪奈津子「宗像大社所蔵文書と宗像大社中・近世史」
『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告Ⅰ　2011

(11) 桑田和明　「戦国期における宗像氏の家督相続と妻女」
『むなかた電子博物館紀要』 第 4 号　2012
(12) 花田 勝広「中世の宗像神社と鎮国寺」
『むなかた電子博物館紀要』 第 4 号　2012